

冀ふ鳥のこゑ降る林なりひもじきこそ詩ひもじさこそ
そ歌

詩歌の本質はハングリーである、という明快なメッセージをこめた一首。「冀ふ」というむつかしい字ども、一度読んだら忘れない。愛誦性にとむ歌で、作者の代表作のひとつになるのではないか。

ギザギザのキリンの影が過ぎてゆく階段席の人々の上を

スポットライトに照らされたキリンの影が、観客席の観客の上をずっと通過してゆく。もちろん首の影だ。不思議な光景である。この不思議を発見した手柄。謎めいた表現だが、すぐ前の作で、サーカスのキリンだということが種明かしされる。種明かしはない方が、読者はより挑発されるかもしれない。

好きといふ暴力君に突き付ける花園神社に秋風が吹く

原尚美

この作と次に上げる増田作とは、よく似た場面、よく似た内容の恋の歌なので、あえて並べておいた。この作、好きという言葉の暴力の意味だろう。一人のあいだで暗黙のうちにこの言葉をさせて来たのだが、思い切って言つたのである。結句、古典和歌のパターーンである「秋↓飽き」の掛詞をひびかせていると読む。

無謀なる挑戦状としてわれは「好き」といふ言葉を口にせり

増田満美子

前作とほぼ同じ状況で、ほぼ同じ場面と思う。原尚美

伊藤一彦

大塚泰子

セージをこめた一首。「冀ふ」というむつかしい字ども、一度読んだら忘れない。愛誦性にとむ歌で、作者の代表作のひとつになるのではないか。

短歌の現在

No.397 今月の15首を読む
佐佐木幸綱

の作には「花園神社」とあるので、室内ではなく、また新宿という繁華街だと分かるが、こちらは室内かどうか、駅とか車の中とかなのか、そのあたりが読者にはわからない。「挑戦状」という語があつて、相手が年長なかな、そんなニュアンスは読める。

恋歌のばあい、場面をとるか、関係をとるか、選択の仕方によつて作者の作風が決定的にちがつてくる好例。放置して四つ目鹿殖ゆる山々の薄氣味悪き声の夕暮れ

壱乃村春彦

「薄氣味悪き声の夕暮れ」が面白い。「声の夕暮れ」という古典和歌にありそうなフレーズに、「薄氣味悪き」という今ふうな言葉を組み合わせて、下句、独特な世界を作つてゐる。ちなみに『国歌大観』を調べてみると「竜田山みねにはげしき木枯にたちまよふ鹿の声の夕ぐれ」(夫木抄)という作があつた。

「四つ目鹿」はキヨンのこと。房総半島にキヨンが増えてゐるというニュースを読んだことがある。

君の胸は砂の音せりみづから下にくぼむしづか
な時計 岸並千珠子

恋歌に「砂の音」は珍しい。素漠と乾いた感じが合わないのではないか、そんな第一印象だが、何度か読み返すうちに、砂ではなく、砂時計ではかる時間のイメージで「君」の雰囲気を描こうとしていることが分かつて、納得した。君の胸に耳を当てるところが分かつて、伝へ得ぬ心明るむ千年を隔てし人の思慕のちかしも